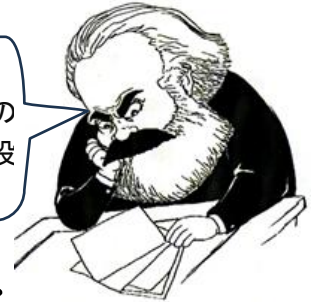


初学者大歓迎!

産業資本家は いかに形成されたか?

東京池袋
『資本論』を読む会

植民制度、保護貿易制度、
国債制度等は産業資本家の
形成を促進する助産婦の役
割を果たしたのじゃな。



5月10日(土)午後6時から9時まで

豊島区西池袋第二区民集会室 豊島区西池袋3-8-20 (福祉ホームさくらんぼ併設)

【範囲】 第7篇 資本の蓄積過程
第24章 いわゆる本源的蓄積
第6節 産業資本家の生成

前回(4月5日)、第4節「資本家的借地農業者の生成」と第5節「農業革命の工業への反作用 産業資本のための国内市場の形成」を読みました。両節では農業革命がもたらした二つの事態に焦点が当てられました。一つは農業資本家(資本家的借地農業者)がいかに形成されていたかということ、もう一つは農村民の土地の収奪が国内市場の形成にどう繋がっていったかということ。ここまでは農業分野が舞台でした。今回は第6節「産業資本家の生成」です。今度は工業部面が舞台になります。産業資本家とは、ここでは工業資本家を意味します。勿論、旧来の生産当事者が封建的なくびきを外しながら小資本家から本物の資本家に成り上がっていくという過程もありましたが、このようなカタツムリのようなゆっくりとしたことでは、時代の要請に応えることは出来ませんでした。絶対主義の時代、王権によって植民制度、国債制度、近代的租税制度、保護貿易制度等が開始されましたが、それを利用するかたちで産業資本家が台頭して行きました。国家は社会の集中された暴力であり、その具体的発揮であるこれらの諸制度は封建的生産様式から資本主義的生産様式への転化を促進したのでした。本節は、これらの諸制度が産業資本の形成および発展においてどのように作用したかを史実に沿って具体的に明らかにしています。

『資本論』は資本主義的生産の本質を把握するうえで欠かすことができない重要かつ浩瀚な書物です。じっくり読み込み一緒に議論することによって、理解を深めることができます。

＜裏面は前回学習会の報告です。参考にしてください。＞

【学習会報告4月5日実施】

第7篇 資本の蓄積過程

第24章 いわゆる本源的蓄積

今回は、予定どおり第4節「資本家的借地農業者の生成」と第5節「農業革命の工業への反作用 産業資本のための国内市場の形成」を読み切りました。まず第4節です。

第4節 資本家的借地農業者の生成

マルクスは、本節のテーマを明確に提出しています。

「われわれは、無保護なプロレタリアの暴力的創出、彼らを賃金労働者に転化させる流血的訓練、労働の搾取度とともに資本の蓄積を警察力によって増進する君主や国家の卑劣な行為、これらのことを考察してきたのであるが、次に問題になるのは、もともと資本家はどこから出てきたのか？ ということである。というのは、農民の収奪は直接にはただ大きな土地所有者をつくりだすだけだからである」(MEW 版原書 770 頁)

本来の意味での産業資本家は、農業であるか工業であるかを問いません。農業も一大産業である以上、農業資本家も産業的資本家です。本節はそのうち農業資本家の生成が考察対象になります(*)。

*次節(第6節)では、産業資本家は工業資本家という意味で使われています。注意が必要です。

借地農業者の起源と形成過程

確かに農民が放逐された後の土地は大土地所有者に集約されますが、そのことによって大土地所有者がそのまま資本家的農業経営者に移行したわけではありません。どのような過程を経て彼らが形成されていったのでしょうか？ その過程を辿ることが本節の課題になりますが、それはドラスティックな過程だったわけではありません。

「借地農業者の生成について言えば、われわれはそれをいわば手探りすることができる。というのは、それは幾世紀にもわたる緩慢な過程だからである。農奴たち自身も、また自由な小土地所有者たちも、非常にさまざまな所有関係のもとに置かれていたのであり、したがってまた非常にさまざまな経済的諸条件のもとで解放されたのである」(同前)

何世紀にも及ぶ長い過程だったというのですが、マルクスはそれを素描しているだけで、本格的に展開していません。でも流れはよく分かります。

「イギリスでは、借地農業者の最初の形態は、自分自身も農奴だったベリフ〔領主の土地管理人〕である。彼の地位は古代ローマのヴィリクスvilicusの地位と似ており、ただ勢力範囲がこれよりも狭いだけである。14世紀の後半には、ベリフは、地主から種子や家畜や農具を供給される借地農業者と置き換えられる。この借地農業者の状態は農民の状態とあまり違わない。ただ彼のほうがより多く賃労働を搾取するだけである。彼はまもなくメ

テイエ〔Metayer〕、すなわち半借地農業者〔Halbpächter〕になる。彼は農業資本の一部分を提供し、地主が他の部分を提供する。両者は、契約で定めた割合で総生産物を分け合う。この形態はイギリスでは急速になくなって、本来の借地農業者の形態に席を譲る。本来の借地農業者というのは、彼自身の資本を賃金労働者の使用によって増殖し、剰余生産物の一部分を貨幣か現物かで地主に地代として支払うものである」(771 頁)

借地農業と言うからには、土地所有の存在が前提されます。第2節には18世紀半ばまでに独立自営農民層であるヨーマンはほとんど居なくなってしまい、また農耕者と共同地との関連の記憶さえも19世紀にはなくなってしまった、とありました。土地の分割化ではなく、囲い込み運動などをとおして大土地所有化が進み、そのもとで農業の資本主義的化が展開された点にイギリスの特徴があります。当然、土地所有にも資本主義的生産様式に適合する形に変化が生じます。1640年頃には新興のジェントリは全土地の80%までを所有するようになり、かつて2/3の土地を持っていた貴族はもはや1/15しか所有しなくなったのことで(『イギリス絶対主義の構造』角山榮著)。

さて土地から収奪された農民のその多くは都市に流れていくのですが、その一方で残された住民は農業労働者として雇われる必要があります。そのためには雇い手が存在しなければなりません。雇い手となる資本家的借地農業者はどのように形成されていったのでしょうか？

借地農業者の最初の形態はベリフだったとあります。しかし文字どおりの借地農業者とは言えないように思います。というのは彼らは封建的枠組みの中で与えられた地位だからです。領主の土地で農奴を監督し生産を管理するという機能を果たすのであり、その機能が後の借地農業者に引き継がれるという意味で借地農業者の最初の形態と言い得るのでしょうか？

その後、ベリフは地主から種子や家畜や農具を供給されて耕作する借地農業者によって置き換えられました。ベリフがこの借地農業者に移行したものなのか、それとは別なのかハッキリしません。彼らはベリフとどこが違うのでしょうか。生産手段は地主によって提供されるのですが、賃労働者を雇うという点がベリフとは明らかに違います。生産物の一部を市場に出し、そこで得た貨幣で労賃と地代を支払い、その残りを彼ら自身の消費に当てるという形だったように思われます。

この借地農業者はさらにメティエ(語源はフランス語 métayer にあるようで、分益(折半)小作農とありました)になったとあります。生産手段の一部を自ら用意し、残りの一部を地主から提供を受けるという形態。農産物を地主と折半することになります。

そしてこのメティエもなくなり、本来の借地農業者が現われます。本来の借地農業者とは、資本を自分で賄い、その資本で賃金労働者を雇って耕作し、生産物の一部を貨幣か生産物で地代を払う形態です。資本家的借地

農業者と同義だと思えます。

16世紀以降の農業革命と価格革命(物価上昇)は借地農業者に有利に働いた

「15世紀をつうじて独立農民や賃奉公と同時に自作もする農僕が自分の労働で富を得ているあいだは、借地農業者の境遇もその生産領域も相変わらずたいしたものでは」(同前)ありませんでした。そんな中で展開された農業革命は、借地農業者の富の拡大を促進しました。

「15世紀の最後の三分の一期の農業革命は、16世紀のほとんど全体をつうじて(といっても最後の数十年を除いて)続くのであるが、この革命は農民を貧しくして行くのと同じ速さで借地農業者を富ませて」(同前)行きました。ここでの農業革命は土地の囲い込みによる牧羊化と農業生産の改良(生産力の増大)の両方を含みます。

もう一つ、価格革命という重要な契機を忘れてはなりません。

「16世紀には一つの決定的に重要な契機が加わる。当時は借地契約が長期で、99年にわたるものも多かった。貴金属の価値、したがってまた貨幣の価値が引き続き低落したということは、借地農業者のために黄金の果実を結んだ。この低落は、前に論じた他の事情はすべて別にしても、労賃を低落させた。労賃の一部分は借地農業利潤につけ加えられた。穀物や羊毛や肉類など、要するにすべての農業生産物の価格の継続的な上昇は、借地農業者がなにもしないでも彼の貨幣資本を膨張させたが、他方、彼が支払わなければならなかった地代は以前の貨幣価値で契約されていた。こうして、彼は、彼の賃金労働者と彼の地主とを同時に犠牲にして、富をなしたのである。だから、16世紀末のイギリスに当時の事情から見れば富裕な『資本家借地農業者』という一階級があったということは、少しも不思議ではないのである」(771-772頁)

海外での金銀鉱山の発見(とりわけボリビアのポトシ銀山が有名)によってもたらされた貨幣価値の低下は、借地農業者の富の増大と拡大にとって決定的な契機となったのです。貨幣価値の低下は、労賃の実質的低下をもたらした(名目的上昇にも関わらず)、借地農業者の利潤を増やしました。土地の長い定期借地期間(99年に亘るものが多かった)は借地農業者に有利に働きました。16世紀末に資本家借地農業者という一階級が存在した理由は、この点にあったというわけです。

以上で本節は終わるのですが、マルクスは、注229でフランスにおける借地農業者の生成にも言及しています。「中世の初期に封建領主への貢租の管理人であり徴収人である差配[Régisseur]がやがて事業家[home d'affaires]となり、これが強請や詐欺などによって資本家に成り上がる」とあります。イギリスの場合とよく似ています。フランスでは借地農場は小規模だった点が異なります。



第5節 農業革命の工業への反作用 産業資本のための国内市場の形成

次に工業資本家(産業資本家)がいかに形成されたかという話に移るはずなのですが、その前にマルクスは、農民からの土地収奪がもたらしたもう一つの重要な点に目を向けています。産業資本のために国内市場を形成したということです。

多くの農民が放逐されたにも関わらずより多くの農業生産物が生み出された

「独立自営農民の稀薄化には、……ただ工業プロレタリアートの濃密化が対応していただけではない。その耕作者の数が減少したにもかかわらず、土地は以前と同量かまたはより多量の生産物を生み出した。というのは、土地所有関係の革命が耕作方法の改良や協業の大規模化や生産手段の集積などを伴っていたからであり、また、農村賃金労働者の労働の強度が高められただけではなく、彼らが自分自身のために労働した生産場面がますます縮小したからである」(773頁)

多くの農民が放逐された後、その土地はどうなったのでしょうか? 牧羊地化のための土地の囲い込みと並んで土地所有関係の革命が生じ、それは「耕作方法の改良や協業の大規模化や生産手段の集積など」を伴い、また生産性の低い小農民経営が縮小しました。その結果、より多くの農産物が生み出されるようになりました。

「農民の一部分が遊離させられるのにつれて、この部分の以前の食料もまた遊離させられるのである。この食料は今や可変資本の素材的要素に転化する。追い出された農民は、この食料の価値を自分の新しい主人である産業資本家から労賃という形で買い取らなければならない。国内で生産される農産工業原料についても、事情は生活手段の場合と同じだった。それは不変資本の一つの要素に転化した」(773-774頁)

生産手段から引き剥がされた農民が賃金労働者になると、彼らは食料等を市場で購入しなければならなくなります。工業用農産物も市場から入手しなければなりません。食料用の農産物は可変資本の素材的要素に、工業用農産物は不変資本の素材的要素に、それぞれ転化します。

ここでなぜか舞台がプロイセンのフリードリヒ二世(フリードリヒ大王)時代(在位1740年-1786年)に移ります。

「たとえば、フリードリヒ二世の時代に、たとえなにもならなかったにせよ[新日本出版訳「たとえ絹を紡がなくとも」]、せつせと亜麻を紡いでいたヴェストファーレンの農民のうち、一部分は暴力的に収奪されて土地から追い出され、あとに残った別の部分は大借地農業者の日雇い労働者になった、と想定しよう。同時に大きな亜麻紡績工場や織物工場ができて、『遊離した人々』は今ではそこで賃労働をしているとしよう。亜麻は見たところ以前と少しも変わりはない。その繊維の一筋も変わっていないが、しかしその体内には一つの新しい社会的な魂が乗り移っている。それは今ではマニファクチュ

ア経営者の不変資本の一部になっている。亜麻は、以前は、それを自分で栽培して家族といっしょに少しずつ紡いでいた無数の小生産者のあいだに分配されていたが、今では、自分のために他人に紡がせたり織らせたりする一人の資本家の手のなかに集積されている」(774頁)

「想定しよう」「仮定しよう」とあり、どこまでが当時のプロシヤの状態のことなのか不明なのですが、仮定の話だとしましょう。

独立自営農民が収奪され、農村に残った人々が借地農業者のもとで日雇労働者として働くようになり、農村から追い出された人々は産業資本のもとで賃労働者として働くようになったことが想定されています。農産物は亜麻で、産業資本はこれを原料にして亜麻糸を、さらに亜麻織物を生産します。亜麻は産業資本にとって不変資本に転化しています。

「亜麻紡績場で支出される特別な労働は、以前は無数の農民家族の特別収入に、あるいはまた、フリードリヒ二世の時代には、ただで取り上げられる租税に、実現された。今ではそれは少数の資本家の利潤に実現される。紡錘や織機は、以前は広く農村に分散されていたのに、今では労働者と同じように、また原料とも同じように、わずかばかりの大きな作業場に詰め込まれている。そして、紡錘も織機も原料も、紡ぎ手や織り手の独立な生存の手段から、今では、彼らに命令し彼らから不払労働を吸い取るための手段に転化している。大きなマニュファクチュアを見ても、大きな借地農場を見ても、それらが多くの小さな生産場が合併されたものだということや、多くの小さな独立生産者の収奪によってできたものだという事はわからない。とはいえ、とらわれない目で見れば惑わされることはない。革命の獅子ミラボーの時代にも、大マニュファクチュアは合併マニュファクチュア〔manufactures réunies〕、合併作業場と呼ばれたが、それは、われわれが合併耕地というようなものである」(同前)

ミラボーは、分散工場は合併マニュファクチュアよりも自由な作業場であると美化しているのですが、合併マニュファクチュアにせよ大借地農場にせよ、それらは資本主義的生産様式の必然的産物だということを見抜けないのです。

なお、合併マニュファクチュアは当時のプロイセンには無く、フランスのものだと思われます。それは manufactures réunies とフランス語で標記されていることからそう言えると思います。ミラボーはフランスの大マニュファクチュアを念頭に、プロイセンの分散工場と比較し、プロイセンのほうに軍配を上げているのです。

農民からの土地の収奪は国内市場をつくりだす

「じっさい、小農民を賃金労働者に転化させ、彼らの生活手段と労働手段を資本の物的要素に転化させる諸事件は、同時に資本のためにその国内市場をつくりだすのである。以前は、農家は生活手段や原料を生産し加工して、あとからその大部分を自分で消費していた。これらの原料や生活手段は今では商品になっている。大借地農

業者がそれを売るのであり、彼はマニュファクチュアに自分の市場を見いだすのである。糸やリンネルや粗製毛織物など、その原料をどの農家でも手に入れることができ、各農家によって自家消費のために紡がれ織られていた物——このようなものが今ではマニュファクチュア製品にされてしまって、まさにその農村地方そのものがそれらの販売市場になるのである。これまでは自分の計算で労働する多数の小生産者に依存していた多数の分散した買い手が、今では集中されて、産業資本によってまかなわれる一大市場になるのである」(同前)

「このようにして、以前の自営農民の収奪や彼らの生産手段からの分離と並んで、農村副業の破壊、マニュファクチュアと農業との分離過程が進行する。そして、ただ農村家内工業の破壊だけが、一国の国内市場に、資本主義的生産様式の必要とする広さと強固な存立とを与えることができるのである」(275頁)

マニュファクチュアは国民的生産の全体を捉えることができなかった

「とはいえ、本来のマニュファクチュア時代には根本的な変化はなにも現われない。人々の記憶にあるように、この時代は国民的生産を非常に断片的に征服するだけで、つねに都市の手工業と家内的・農村的副業とを広い背景としてこれに支えられているのである。この時代はこれらのものがある種の形態や特殊な事業部門やいくつかの地点では破壊するにしても、よそでは再び同じものを呼び起こすのであって、それというのも、この時代は原料の加工のためにある一定の程度まではこれらのものを必要とするからである。それだから、この時代は一つの新しい部類の小農民を生み出すのであって、このような農民は耕作を副業として営み、生産物をマニュファクチュアに売る——直接にかまたは商人の手を経て——ための工業的労働を本業とするのである」(776頁)

マニュファクチュアは手工業制という制約がある故に、この記述にあるように自家工業さえ必要とする必要があります。マニュファクチュアの限界は、機械制大工業によって突破されなければなりません。

機械制大工業こそが国内市場全体を征服する

「大工業がはじめて機械によって資本主義的農業の恒常的な基礎を与え、巨大な数の農村民を徹底的に収奪し、家内的・農村的工業——紡績と織物——の根を引き抜いてそれと農業との分離を完成するのである。したがってまた、大工業がはじめて産業資本のために国内市場の全体を征服するのである」(776-777頁)

本源的蓄積は国内市場を切り開いたとはいえ資本のために国内市場全体を征服するところまでに至りませんでした。機械制大工業の確立を待つこととなります。

(雅)

※今回は5月10日(土)です。第6節「産業資本家の生成」をやります。会場は西池袋第二集会所です。

